

東京23区の寺の鐘 基礎研究と実態調査

34003 野口 晋平

序

かつて「江戸」であった頃、ここ東京には朝に夕に寺の鐘が鳴り響いていたという。しかし今現在、聴こえるのは交通騒音や夕方のチャイム、ノイズばかりである。ここ東京23区内に於いて、依然として毎日のように鐘を撞いて居る寺は、果たしてあるのだろうか。あるとしたら、どのくらいの数の寺院が、いつ・どこで・どのように鳴らしているのだろうか。

一. 研究の主旨と方法

本論の主旨は、東京23区の現存する寺の鐘について、それらが「いつ・どこで・どのように」撞かれて居るのか、その具体的な使用状況の実態を調査することを通じて、東京都市部に於ける鐘の「生ける実像」を捉えることである。

* 手順 *

- (1) 東京23区内全寺院の中から、梵鐘を所有する寺院＝「鐘持ち寺院」を割り出す。
(方法：電話による聞き取り調査＋現地へ脚を運んでの実地調査)
- (2) 調査結果を23区別に集計。および全区統計。
- (3) 鐘の使用状況（撞く時刻や用途、方法）に応じた寺の分類。
- (4) 考察：以上の調査結果を踏まえ、使用状況の傾向実態について検証。多角的に考察する。

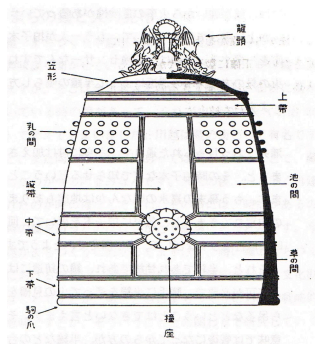
二. 基礎研究：かつて鐘はどのように鳴っていたのか

「現在」を調べる前提：基礎事項として、従来の鐘の基礎知識と実態について理解、把握する。

1. 鐘とは何か

< 定義 >

本論で扱う“かね”とはすなわち鐘楼堂に吊られているような寺の鐘、「梵鐘」である。梵鐘とは、主に青銅製で、外から撞木によって打ち鳴らされる釣鐘のこと。



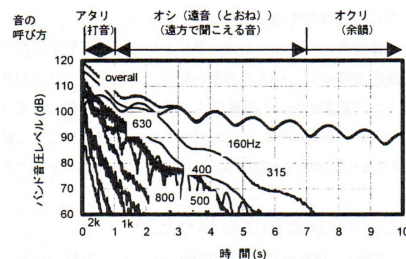
(図1：梵鐘)

< 起源 >

日本の梵鐘の起源は6世紀中国。仏教伝来と同一。

< 鐘の物理的特性 >

梵鐘の音は多くの部分音からなる複合音であり、独特の「うなり」は、時間の経過によって三段階の音に分けられる。一番主要な基音は「オクリ」(=余韻)に現れるが、実際の「聞こえ」は諸環境条件および心理状態にも左右され、架空音さえ生む。



(図2：三段階の聞こえ「アタリ・オシ・オクリ」)

< 鐘の価値の変遷史 >

古来より鐘の音は「あの世とこの世を結ぶもの」として神格視され、雨乞いなど、異界との交信儀礼の際に打ち鳴らされた。しかしその全国的普及によって稀少性が薄まるにつれ、その存在価値も変化(合理化/脱神格化)していく。江戸時代に至ると、時報＝「時の鐘」という機能が完全に主軸に移る。

鐘の歴史は多難である。江戸の明暦の大火、明治の廃仏毀釈、大正の関東大震災、昭和の空襲と戦時供出、こうした度重なる災禍によって、東京の梵鐘はその9割が失われた。そして戦後復興・時計普及の裏で時の鐘の不要化および「騒音防止」。現存するものも今や肩身が狭くなっている。

< 江戸の時の鐘、その分布と縁起概略および現状 >

江戸時代、幕府公認で設置された時の鐘は10～最大12カ所。可聴範囲が江戸市中をカバーしている様子が窺える。江戸市中拡大と共に増設。

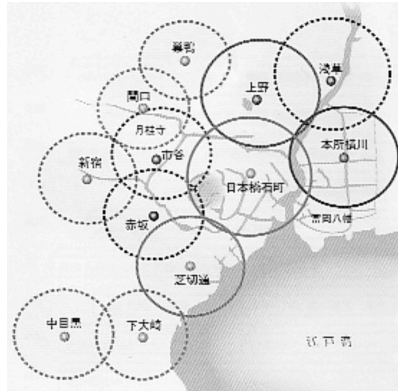


図3：江戸 時の鐘 可聴範囲予想図(聴取料取り立て領域から2～3kmと推定。実線が今も毎日現役の鐘)

毎日現役鐘：3ヶ所(上野、浅草寺、目黒祐天寺)
鐘現存：7ヶ所(上3ヶ所＋四谷天龍寺、赤坂圓通寺、日本橋石町。以上は除夜のみ撞く／一つは築地本願寺内に安置) *その他は廃寺或いは供出等により紛失。

三. 実態調査：いま鐘はどのように鳴っているのか

< 鐘持ち寺院の具体的実態調査 >

分類フォーマット：

○寺 [使用状況別分類記号]

●@ [所在地] / [宗派] / [鐘撞く時刻、回数]

* [その他] …… 周辺環境や鐘楼位置など特記

以上の調査と分類作業による統計結果が次の表。

表1：東京23区：鐘の使用状況に関する宗派別寺院統計表

	日蓮	浄土	曹洞	真言	真宗	臨濟	天台	単立	他	計
A	10	7	11	18	3	8	4	1	1	63
B	1	1	0	1	0	0	0	0	0	3
C	23	25	17	51	16	4	8	8	1	153
D	2	4	5	3	2	1	0	1	0	18
f	2	1	1	5	2	1	1	0	0	13
H	34	33	28	70	19	12	12	9	2	228
総計	341	405	235	411	358	96	115	113	2	2076

- A: 毎日撞く
- B: 毎日ではないが定例的に
- C: 年に1～数回、大事の際のみ
- D: 所有するが撞かない
- f: 参拝者が自由(任意)に撞ける
- H: 鐘を年間一回以上撞く寺院 (A+B+C)

< 23区総寺院統計結果 >

総寺院数 : 2,076ヶ寺
 鐘持ち寺院数 : 246 (約12%)
 年間鐘撞き寺院数 : 228
 毎日鐘撞き寺院数 : 63 (約 3%)

鐘持ち寺院のうち、日常現役の割合は25.6%
 =約1/4が、毎日鐘を撞いていることがわかった。

四. 考察：総括

< 傾向の検証および考察 >

1. 時間について

毎日鐘撞き寺院の時間帯別パターン分けの結果

「夕方のみ撞く」 : 25 (最多)
 「朝夕撞く」 : 18
 「朝のみ撞く」 : 17
 「朝昼夕撞く」 : 3
 「昼のみ撞く」 : 1 (最少)

また、時間帯3種ごとに総和した統計によると

朝 : 昼 : 夕 = 38 : 4 : 46

「夕方のみ撞く」というタイプが最多、朝撞く場合は夕も撞くという場合も多い。他方、昼に撞く例は稀。この傾向は、鐘を撞く側・近隣住民両方にとって“負担”が少ない時間帯が選択されたものと考えられる。

2. 場所(各区別の地域性)について

世田谷、目黒、板橋、江戸川など、東西南北問わず都心から離れた地区=旧江戸市“外”の方が、日常的な鐘撞きに対し積極的である比率が高い。(ドーナツ化)この背景として、市外西方(武蔵野台地)の主に崖線上に江戸時代以前からの古刹があること、災禍の度に東部から移築されたこと、江戸以降の新鐘は特に戦時金属供出の対象にされたことが挙げられる。東部下町(江戸期開拓の新地区)ほど“小規模寺の多数局所集中”が見られるが、鐘持ち軒数は比例しない。一部鐘持ちが集中する地区(柴又など)は戦後町おこしの成功した特例である。また南北端および各地平地(元田園地区)は、住宅街の中にヶ単立、あるいは旧街道沿いに居並ぶ傾向がある。

3. 撞き方について

かつて江戸では「明け六ツ、午九ツ、暮れ六ツ」と鳴っており、不定時法により時刻は季節ごとに変動した。撞き方については、撞く数・方法共に各寺ごとの「工夫」=多様化・個性化が見られる。(撞き数…最多6回、最大18回、最少3回)「暮れ六ツ」だから“6回”等、一部を現代的に解釈、伝統的作法になるべく忠実たらむとする傾向が強い。捨て鐘の数・撞き方は、各寺ごとの工夫や宗派ごとの規定によって多様。また、コンピュータ制御による「オート鐘撞き」の事例も登場している。撞き方は、各寺個別の諸事情(接近近隣への騒音配慮、撞き手の体力的問題など)が直接的に影響を及ぼす。かねてより鐘撞きが認知されている大きな古刹の方が、日頃撞き続け易い境遇にあるといえる。

4. 宗派について

朝課坐禅のある禅宗系が、毎日撞く比率が高い。また、真言系が大きな催事で鳴らす方に積極的と窺える。小寺院の比率が高く鐘のない寺が多い真宗系はいずれの数値も低いのが目立った。異宗派同士の現状把握は乏しい。

5. 鐘楼堂の建築様式について

平均9段の昇段を要する基壇(=土台。組石造)を設けた型が基本。江戸時代風の折衷様式、四柱内転び平面(非方形)、瓦葺木造・入母屋造、側面吹きさらしが過半数。幾度の震災や火災を被った直後再建されたものは、防火性を考慮しSRC製にした鐘楼が少なくない。

6. 境内に於ける鐘楼堂の配置/撞く方角について

江戸以降の新刹に関しては「山門入ってすぐ脇(右か左)の隅」に設置される事例が殆どを占める。“境内自体が比較的周囲より高台に位置し、特に境内自体が崖線段丘上にある”という事例の場合、鐘楼は下から第二段階層(山門のすぐ脇)の隅か、最上階層(本堂と同一レベル)の何れかに分かれる。(前者が主流)鐘楼堂の周囲は、一面が墓地に接していることが多い。

江戸以前の古刹では「本尊の左耳に向けて打つ」と方角が定まっていたが、現在、撞く方角は特に考慮もされないと。言う。(実際まちまちである。)しかし傾向として、境内の“外”を向いて撞かれる=外界/入口との関係性が重視されている。寺鐘が「まちの鐘」となった背景や風水的運氣思想の影響が窺える。

7. 都市スケールから見た鐘持ち寺院の所在について

全体的には散逸的な印象だが、「局部的寺町内の中小規模の寺ヶヶ、または連鎖的複数ヶヶ」「住宅地内の大規模寺ヶヶ」この二類型に大別される。前者で複数ヶヶ寺(2~3ヶヶ)ある場合は約2~300mの範囲内で近接し合う事例が多く、鐘撞き時刻を割り振る。後者は、単発的・散逸的で、幹線道路からも比較的距離のある古刹である場合が多い。この場合、鐘無し寺院が周囲に群属することがよく見られる。何れのケースも、近隣環境は閑静な住宅街が主。鐘楼堂の所在については、昭和大戦までの災禍を逃れたか否か、その“偶然性”に大きく左右されている。その後再建されるか否かは、偏に檀家の力に因る。

< 総括 >

江戸は抑、川越・千葉等の近郊とも関係し成立している。今後調査対象を拡げるとより深い考察も可能だろう。今、寺の鐘の音は「特定の時間・特定の場所」に赴かないと「聴こえない」。これを逆手に取れば、鐘は、静けさを演出できるという点で希有な音響装置だと言える。将来、生ける音具としての価値の躍進を期待したい。

(図の出典)

1, 2 : 日本サウンドスケープ協会誌vol.1.6 -p25/p32
 3 : 吉村弘「大江戸 時の鐘 音歩記」(春秋社)付録

指導教員 佐久間哲哉 助教授